

ヨシナカ新聞

11月号

発行所
株式会社ヨシナカ
東京営業所
TEL:03-3555-0796

言葉の語源

『阿漕(あこぎ)』

一般に知られている言葉の意味が語源を調べると逆という例を来月号にかけて二つ紹介したいと思います。今月号では『阿漕(あこぎ)』という言葉の語源を紹介させていただきます。

『阿漕』は、どん欲で無情、強欲であくどいというような、悪い意味で理解されていますが、その謂(い)われは意味深いものがあります。

三重県津市に阿漕浦海岸があります。津市は昔安濃津(あのと)と言われていました。安^ニア、濃^ニコイ、コキから「アコギ」と転化させたのが「阿漕」の地名となったという説が伝えられています。

そして、この地で伝えられているのが、『あこぎのへいじ(阿漕の平治)』。大辞林第三版の解説では、「禁漁であった伊勢国阿漕ケ浦に網を入れた為に捕らえられ、簀(す)巻きにされたと言われる伝説上の漁師」とありますが、実際に地元で伝えられている阿漕平治は少し違います。

阿漕平治は母が病気で寝込んでいたため、伊勢神宮へ奉納するための漁場と知りつつ、病によく効くという「矢柄(やがら)」という魚を密漁してしまつたのですが、浜辺に自分の名前が書かれた傘を忘れて帰ってしまった為に捕らえられ簀巻きにされて海に放り込まれてしまいました。

この事から「阿漕平治は欲深い」→阿漕^ニ欲深いという言葉だけが残ってしまった訳ですが、地元では阿漕平治は親孝行の息子として語り継がれており、毎年8月14、16日は平治神社で彼を偲んで盆踊り供養が行われているそうです。

ステンレス豆知識

短所を赤字にしてみました。こうしてで特性はコントロールされている様です。

SUS304をベースにした各成分の特性です。見ると、主としてC,Si,Mnの含有量のバランス

記号	C	Si	Mn	P	S	Ni	Cr
名称	炭素	ケイ素	マンガン	リン	サルファ	ニッケル	クロム
成分	0.08%以下	1.00%以下	2.00%以下	0.04%以下	0.03%以下	8.00~10.50%	18.00~20.00%
特性	増えると硬さや引張り強さが高くなるが、耐食性が落ちる	引張り強さが高くなる	固溶可(均一に溶け込ませる)の安定に有効	不純物。増えると脆くなる	増えると削りやすく、穴も開け易くなるが、割れやすくなる	酸化被膜を保護する。増えると耐食性良くなるが、加工硬化性が悪くなる	酸素と結合(酸化)して不動態被膜を形成する

K社員のフルート奮戦記

多重録音

平成21年11月に行われる発表会で演奏する曲を『風』に決め、バックの演奏を自分で作ろうと思った私は、レッスン時に先生にその旨を相談したところ、賛成して下さったので、さっそく準備に取りかかりました。使用する楽器はリズム、アコースティック・ギター(A・G)、ストリングスと決めました。リズムはドラムマシン、A・Gは友人に借りているギター、ストリングスは電子ピアノの音源を使って演奏する事にしました。

録音はMTR(マルチトラック・レコーダー)を使用してワン(1)・トラック毎に録音していきます。何度もオリジナルの音源を聞きながらリズムをドラムマシンに打ち込んで1トラック目を録音。それを聞きながら2トラック目にギターを録音します。そして最後にストリングスの音を3トラック目に録音しました。何度目も失敗したので、完成した時は達成感に浸ってしまいました。肝心のフルートの演奏が一番の課題として残っていることを忘れてしまっていた瞬間でした。

里の秋♪

11月に入り、秋の気配が濃くなって来ましたが、『赤とんぼ』や『ちいさい秋みつけた』等の童謡や小学唱歌をこの季節に聴きますといつもより心に沁みます。私にとっては『里の秋』がメロディーの美しさもあって、特に好きな曲の一つです。この『里の秋』、調べてみると、元々は戦争に行く人を励ます為に書かれた詩であったそうです。

作詞：斎藤信夫、作曲：海沼實の『里の秋』は童謡

歌手の川田正子が歌い、1948年(昭和23年)、日本コロムビアより発売されました。1945年(昭和20年)12月24日、ラジオ番組「外地引揚同胞激励の午后」の中で、引揚援護局のあいさつの後、川田正子の新曲として全国に向けて放送されると、放送直後から多くの反響があり、翌年に始まったラジオ番組「復員だより」の曲として使われるようになりました。

1番ではふるさとの秋を母親と過ごす様子、2番では夜空の下で遠くにいる父親を思う様子、3番では父親の無事の帰りを願う母子の思いを表現していますが、元の詩は、斎藤信夫がまだ国民学校の教師をしていた1941年(昭和16年)12月に作られた、1番から4番までの歌詞で、後に童謡の雑誌に掲載された『星月夜(ほしづきよ)』というタイトルでした。

太平洋戦争の始まりを報せる臨時ニュースに高揚感を覚えた斎藤信夫が、その思いを書き上げ、1,2番は「里の秋」と同じ歌詞だが、後半の3,4番は「父さんの活躍を祈ってます。将来ボクも国を護ります」という様な内容で締めくくられており、早速、童謡にしてもらうため海沼に送ったものの、曲が付けられる事はなかったそうですが、戦後、海沼の要望により、現在の詩になり、タイトルも『里の秋』に変更されたそうです。

